

俳句的なことから (5)

松村巨湫先生

中嶋 嶺雄

最近のような俳句隆盛の状況に出会ったとしても、おそらく時代に背を向けて自らの俳句道を求め続けるだろうと思われる俳匠に、松村巨湫（一八九五～一九六三）という存在があった。

松村巨湫といっても、今日の俳壇では知る人も少ないであろう。しかし、私にとっては、巨湫先生ほどに言語表現の彫琢（ちようたく）に身を削った文学者を知らない。私の父（晴陽）ら巨湫主宰の俳誌「清淨集」や「樹海」に集った古参の同人たちは、巨湫編「現代俳句表現辞典」（資文堂、昭和三年）に導かれて、戦前の山の手文化の拠点・東京田端にあった巨湫塾に参じた門弟である。しかし、それらの門弟たちも晩年の巨湫先生の俳句道にはついてゆけなくなり、巨湫先生はいわば孤立無援のなかで、へ死ぬことを互いに言いあふなつ月夜への辞世の句を夫人に残されたまま、文字通り清貧のうちに生涯を閉じている。

子供の頃から可愛がっていた私は、晩年の巨湫先生が音韻律や思惟律といった散文風の「格はいく」へと飛躍してゆき、さらに意味論にも手を染めておられた時期にしばしばお手紙を頂戴したけれど、言語学の専門家を凌ぐ蘊蓄（うんちく）を傾けられていた。

巨湫先生はその師・臼田亜浪の「石楠」の作風には早くから批判的で、「薄っぺらな裁ち切りの短冊のような句」「醇化（じゅんか）の足りない想念」といった書き込みもある。

このような巨湫先生が世に送った異色の女性俳人が、鈴木しづ子であった。

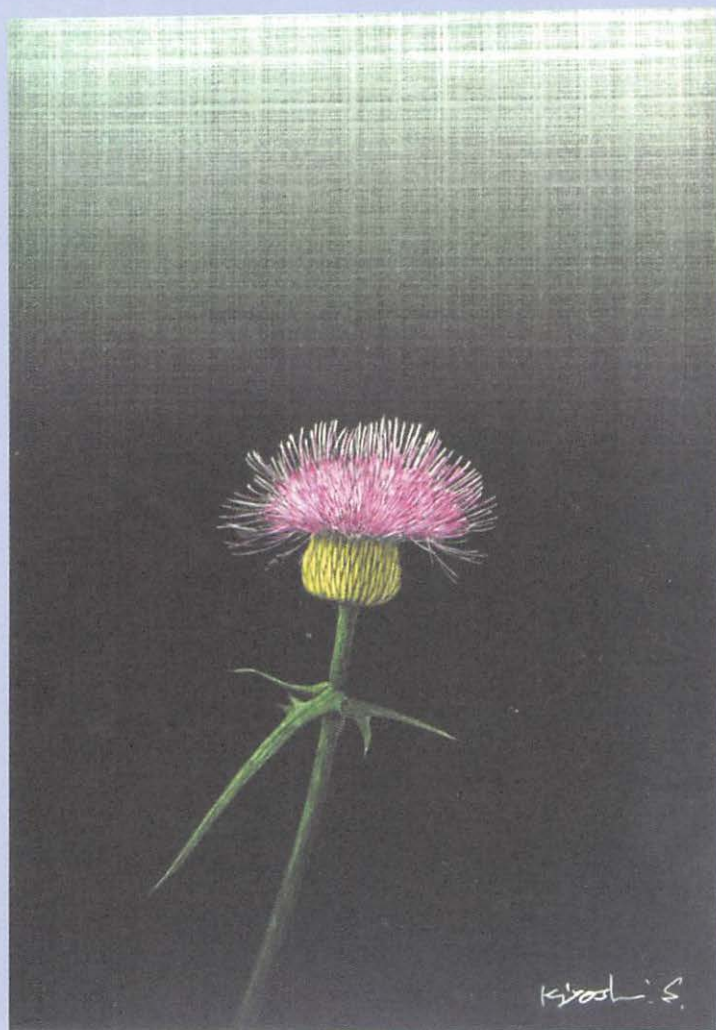
（国際社会学者）

目次(218号)

俳句的なことから (5)	表紙絵	斉藤 清	1
俳冠抄	題字	佐藤 嶺雄	2
風のロンド		中嶋 嶺雄	3
電光板		佐藤 文子	4
麻酔		山本 佑子	5
俳句アンゲル			6
邂逅集			7
五句選	塩川 洋子・小林 円・伊藤みち子		8
梓集			9
しなの茶房	大西あい子・中蔵 水声		10
風発	武居 武志・高野 悦美		11
溪流	下田 幼和・萩原 香流		12
一句の衝撃	武 大月 志星		13
一句一会	清水 奉人・永沼 手塚		14
青嶺集	卓 金田 町子		15
青樹集			16
萌芽集			17
エッセイ			18
久女雑感(15)	恒成 巧		19
万華鏡	増田 連		20
せせらぎ	中村 和代		21
例会作品			22
文箱			23

平成七年四月十九日 第三種郵便物許可
平成十五年五月十日発行（毎月一回十日発行）
第十九卷第五号五月号（通卷二一八号）

信濃俳句通信



2003 5月号